

あじさいの歌
寒　　い　　朝

石坂洋次郎文庫

13

新 潮 社 版

あじさいの歌・寒い朝

石坂洋次郎文庫13

価 490 円

Printed in Japan

© Y. ISHIZAKA

昭和41年 7 月25日印刷

昭和41年 7 月30日発行

著 者 石 坂 洋 次 郎

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社
会社

東京都新宿区矢来町71電話

(260) 1111 振替東京 8 0 8

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿 加藤製本所

〈乱丁、落丁本はお取替いたします〉

目次

寒い朝

五

あじさいの歌

九七

著者だより

四五三

解説・小松伸六

四五六

あじさいの歌・寒い朝

寒い朝

1

寒い朝だった。

高校生の三輪重夫は、白い息を吐きながら、駅へ行く道を急いだ。この道は、去年から舗装されて、ぬかるみや埃を踏まずに歩けるようになったが、道路の両側には、土の部分で少し残されており、そこには、白い霜柱がギザギザに立っていた。

高台であるだけに、冷えがいつそうきびしいのである。銀杏の並木の裸のくろい枝々が、昼間の快晴を思わせるうす青い空を目掛けて、金属のような鋭さで手を伸ばしている。たけばカチンと音がしそうだ。

重夫は、このきびしい寒さを、ニキビ盛りの皮膚（じっさい）にはニキビなど出ていなかったが）に気持よく感じている。細長い足にピッタリくっついた黒のスボン、青いラバソールの靴、上半身のほうは、上から襟（えり）に毛のついたグ

レーのジャンパー、その下がうす茶のセーター、セーターの胸元からは黄色い毛のシャツがのぞいている。頭はボサツとしたG・I刈りだ。

全体が無造作に着崩（きず）れてるように見えるが、絵の才能があり、それにしやれッ気も強い重夫は、服装にはそれ相応に頭を使っているのだ。一人で歩いている所を見ると、ちょっと色気づいた高校生という感じだが、この服装で、着飾った大人たちの間に入っても、ちょっとも見劣りがしないばかりか、自分の存在を何気なしに主張している風があつて、この野郎が——と思わせるものがある。それは女の子に欲しいようなセンスだった。

そして、今日は、ベルトでしばった教科書のほかに、赤と黒のチェックの鞆（たもと）を片手にぶら下げていた。足が長いせいもあるが、歩き方がすごく早い。前のめりに上体を泳がせて、まるで駆け足で人生を送ろうとでもしている人間（ひと）のようだ。

日吉の駅（えき）についての。時間が早いので、ホームには客がまばらだった。重夫は、鞆をベンチの上にそっと置くと、落ちつかない風で、冷たい空気がスウスウ通うひろいホームを往たり来たりした。ときどき、自分でも気づかず、ホッと嘆息（ためいき）を洩（も）らしたりした。

まもなく電車が来た。が、これも早山の労働者や勤め人がボツリボツリ乗っているばかり。スチームがまだ効いてないのか、ガランとした室内はやけに寒かった。

重夫は、また、チェックの鞆を網棚に大切そうに載せて、その下の座席に腰を下ろした。人家や畑や川など、朝日を浴びた沿線の風景が、窓の外を明るく流れていった。一と駅ごとに客が少しずつ殖えていく。重夫は、やはり落ちつかない風で、長い足を組み合せたり解いたりしていた。ときには掌で頭を強くこすり下ろしたりもした。これは困った時にする重夫の癖だ。

そのうち、電車は都立大学の駅についた。重夫は網棚の鞆を下ろし、チャックを少しばかりあけて中をのぞくと、それをそっと下げて、電車から下りた。そして、例の大腿で、西側の大学に行く坂をのぼっていった。もうこのころには、勤めに出る人々が、重夫とすれちがいに、不ぞろいな一つの流れをなして、駅の方へ動いていた。

重夫は、大通りから屋敷町の狭い道に曲っていった。ヒバやツゲやサツキなどの緑の生垣に囲まれた家々が、朝日を浴びて、ひっそりとしずまりかえていた。そこらには山茶花のまっ白い花が咲いているかと思えば、沈丁花がブーンと匂って来たりする。

角の屋敷が目ざす岩淵とみ子の家である。大谷石の門柱には、岩淵という標札がはめこまれ、門から玄関まで敷きつめた鉄平石は、霜がとけてしとどに濡れている。ここにも山茶花が白く咲いていたが、南天の赤い実とうつり合って、どちらもひっそりと美しかった。

重夫は意気こんで門を入ったが、玄関の一步手前で回れ右をして、往米に出て来てしまった。そして、一度おじ気づくと、門の前を往ったり来たりするばかりで、中へ入れなくなってしまうた。誰も見てないのに、テレたように何べんも掌で頭を強くこすりたりした。

岩淵とみ子は、重夫の同級生で、仲がいい友人なのだ。今朝は、約束の品物(?)を届けに来たのだが、はじめて女の子を訪ねるので、どうも工合がわるくて、足がすくんでしまうのだった。

しばらく往来でもたついたあげく、重夫は、自分の意気地なさに腹が立って、やけくそな勢いで門の内に入り、学校でやってるような大声で、

「とみイ!……とみイ!……」と呼んだ。

その上、鋭い指笛をピッ! ピッ! と二度鳴らして、相手方の注意を喚起し、自分は、喧嘩の相手でも迎えるように、足をはだけて玄関をにらんでいた。

と、入口のガラス戸があいて、紺のストラックスにピンクのカーディガンをつけた中年の婦人が姿を現わした。色が白く、額がひろく盛り上がり、顔全体が少ししゃくれ気味で、とみ子によく似ているから、この人が母親の真知子にちがいない。

「いま、とみ子をお呼びになったんでございますか」

と、婦人は微笑を浮かべながら尋ねた。

「ええ。そうです。僕、同級生の三輪重夫です。とみ子さんに用事があってよったんです……」

と、重夫は固くなって答えた。

「まあ、三輪さんですの。とみ子からしょっちゅうお話を伺っていますわ。ほんとに、とみ子がいろいろお世話になってすみません。私、とみ子の母親でございます。さあ、どうぞお入りください。私どもはいま食事中ですけど、すぐ済みますから、応接間でお待ちくださいませ。……まあ、すいぶんお身丈みたちけが大きくなっていらっしゃる。それにハンサムですわ……」

玄関の三畳には、水色のネクタイつきの紺の制服を着た岩淵とみ子が立っていた。黒の木綿のストッキングをつけて足が、長くまっすぐで、いい身体つきをしている。色は浅黒く、目の光りが強く、唇くちばしがうす赤く、耳たぶが豊かで

桜色に透きとおっており、爽さわやかな感じがする娘だった。食事をこままで持ち越して来たというのか、片手に食べかけのトーストパン、片手にコーヒー茶碗ちやわんを持って、母親と重夫の問答を聞いていたが、

「重夫さんのね。呆あきれたわ。大きな声で『とみい、とみい』って怒鳴ったり、犬を呼ぶみたいに口笛を鳴らしたり、御近所にきまりがわるいわよ。……ちゃんと玄関の呼鈴を押して『お早ようございます』とかなんとか、御挨拶が出来なかったの……?」

「僕ね、そうしようと思ったけど……はじめて女の子を訪問するものだから、ついテレちゃってさ……。あれでも一生懸命だったんだぜ」

と、重夫は玄関の三和土たどに入っても、まだ頭をかがいてた。

「今度からエチケットを守ってくださいね……」

「なんですね。とみ子。わざわざお寄りくださったのに……。お前だって、人さまのエチケットをかれこれ言えませ

んよ。なによ、その恰好かっこうは——。飲みながら、食べながらお客さんを迎えに玄関に出て来るなんて……」

「ほんとのお客さんならそうしないわ。重夫さんはお客さんの部類に入らないわよ。人を犬みたいに呼ぶんですも

の。……応接間よりも食堂がいいわ、ママ。部屋が温まってるんですもの。いらっしやいよ、重夫さん……」

とみ子は、廊下を右手に曲って、小さな食堂に重夫を案内した。南と東に窓がある明るい部屋で、東の窓からは朝の日光がさしこんでいた。よく磨かれたテーブルの上には、チューリップが生けてあり、それを挟んで親子の食事の支度が整えられてあった。ガス・ストーブが燃えていて温かだった。

食堂につづいて台所があり、ここも光るほど、拭きこまれ、とり片づいている。

食堂の南側は、まわりがさまざまな樹木で囲まれた庭になっており、まん中に、小ぢんまりした芝生が出来ていた。いまは草が枯れてもの寂しげだ。

重夫は、親子の対角線の座席に坐^{すわ}らされて、例の鞆をそととテーブルの下に押しこんだ。

母親は、ふと気づいたように、「ああ、三輪さん。およろしかったら、私どもと一緒に食事をなさいませんか？ 私どももいまはじめたばかりでございますの。学校の時間は十分ございますし……。ねえ、そうなさいませよ」

「いらないわよ、ママ。重夫さんは食事をして来たばかり

だわ。なんならコーヒーぐらいにしたら……。ねえ、重夫さん」

「うん……」

と、重夫は目の前に並んだ献立——トーストパン、目玉焼にベーコン、トマトジュース（このコップはもう二つとも空になっていたが、残った汁の色で分る）、牛乳（こいつは苦手だがコーヒーならいい）などを、下目づかいにジロリと見て、とみ子に逆らうような口調で、

「僕、朝飯は食べて来たんだが、無理にすすめられれば、もう一ぺん食べられるんだ……」

真知子はクスクス笑った。重夫がテレテ固くなっているの、心にもなく不作法なことを言うのがよく分るからだ。

とみ子は、目を丸くして、

「図々しいわ。ママ、すすめるんじゃないかったのに……」

「いいのよ、いいのよ。正直におっしゃってくださいよかったですわ。三輪さん、いますぐつくりますからね。食事って、人数が多いほどおいしいものなのよ……」

真知子は気軽に台所に立っていった、手早く支度をはじめた。とみ子も重夫の顔を見つめながら、おかしそうに、「朝っぱらから食事をねだるお客さんに飛びこまれて、岩

淵家の大損害だわ。私、帳面に、朝飯一つ貸し、とつけておいて、その分だけ、今度いつか重夫さんの家に行つて、お返しをとってくるわよ……」

「ああ、いいよ。歓迎するよ」

「でも、貴方^{あなた}のそこ、お母さんがいないから食事がまづいんでしょう」

「そうでもないよ」

「——ほんとにどなたが食事の交度をなさいますの。ばあやさんでしょうけど……」

と、台所で手を動かしながら、真知子が尋ねた。

「ときどき気が向くと、父がやることもあります」

「まあ、お父さまが……。お上手？」

「ええ。母が亡くなつてから、家族といえは、ずうっと僕と二人ぎりですし、その間に慣れたんでしよう。わりと上手です。ちゃんとカッポウ前掛もあります……」

「おかしいわ」

と、真知子ととみ子は、声をあげて笑つた。

「僕だってライスカレーぐらいつくれるんだぜ。味つけには自信があるんだ……」

「ほうら、とみ子。耳が痛いでしょう……」

「ううん。男の学生がお料理が出来るなんて、ちっとも感

心しないわよ……。そうだった。重夫さん、用事って何よ。貴方が変なことばかしいうんで、それを聞くの、忘れちゃつた……」

「ああ。……いつか約束したもの、もつて来てあげたんだよ」

重夫は、テーブルの下の袍を曳きよせて、チャックをはずし、中から、コロコロ肥^こつた、身体が茶色で、鼻のさきがくろい子犬をとり出して、とみ子の足もとへ押ししてやつた。

子犬は、ひろい所に出されてうれしそうに、ヨチヨチ駈け出して、とみ子の足にからみついた。

「ワア!……なによ、これ。私、こんなものくれなんて言

わなかつたわよ」

「言つたじゃないか!」

と、重夫はとんがった口調で言つた。

「タネのいい子犬が生れたから上げようかと言つたら、家は女ばかりの世帯で不用心だからぜひちようだって、そう言つたじゃないか」

「言つたかなあ。……言つたとすれば、それはほんのお愛^{あい}想^おだったのよ。私って、社交家だからな。……ワア!、くすぐったい。私の足をかじってるわ。可愛いわ。名前なん

でいうの？」

「名前なんかまだつけてないよ。君にくれるんだから、君がつけるだろうと思ってる」

「あら。名なしなの？　じゃあ、いままで、イス、イスって呼んでたの？」

「まさか。……ちゃんと名前を呼んでたよ。エへへ……」と、重夫は急に崩れた調子で笑い出した。

「いやあね。何がエへへ……よ。貴方、なんて呼んでたのよ？」

「僕ね、考えるのが面倒くさいし、ちょっとの間だと思っただから『とみイ』って呼んでたんだよ。フフフ……」

「まあ、ひどい。ひとの名前を犬につけて……。貴方それで、頭をボカボカ殴ったり、踏んづけたりしてたんでしょ。ひどいわ！」

「そうでもないよ。そりゃあしつけが大切だから、叱ったりもしたけど、ずいぶん可愛がって、父に内証で、抱いて寝てやったことだってあるんだぜ。ほんとだよ」

「犬を抱いて寝るの？　どうかと思うわ。……あつ、この犬だめよ。別なのととり換えてもらうわ。『とみイ』っていう名前と呼んだのは、この犬メスだからでしょう。うちには、ママも私も、ママの内弟子の桶川さんもばあやも、み

んな女ばかりだから、もうこの上メスはいらないのよ。家中女くさくて頭が痛くなるわ。オスの子犬ととり換えてちょうだいよ……」

「ちがうよ。僕、便利だから『とみイ』って呼んでたけど、こいつはオスだよ。ほら、見るよ……」

重夫は、子犬をひろい上げて、お腹のあたりを、とみ子の前にさらしてみせた。

「そうね。なんか小っちゃいものがくつついてるわ。……オスだね。ママ、この犬、もらっていいでしょう……」

ジュースやトーストや、支度が出来しだい、重夫の前に運んでやっていた真知子は、内心ハラハラしながら、二人の会話を聞いていた。が、言い方ではずいぶん下品になるはずのことが、カラッとした気分でやりとりされてることが感じられて、自分までがほのほとした明るい気持ちにさせられた。

「いいわ。貴女が好きだったら飼うことにしましょうよ。ほんとに可愛い子犬ね。……三輪さん、ありがとう。みんなで大切に育てますからね。ときどき見に来てくださいますよ」

「これできまったわ……」

と、とみ子は、いたすらっはい目つきで、重夫の方を眺

めて、

「さっそく名前をつけなきゃあならないんだけど、なんとかしようかな。面倒がないように『シゲオ』ってつけようかな……」

「よせやい！」

「いいじゃないの。その代り、ときどき抱いて可愛がってあげるわよ」

「とみ子。失礼ですよ」

重夫の分の支度も出来て、真知子ととみ子は、中休みしていた食事を、三人で一緒にはじめ出した。

テーブルの下では、子犬がクンクン鼻を鳴らしながら、とみ子が床に投げてやるパン屑を拾いあさっていた。

2

重夫は、食堂の雰囲気^{ふんいき}に慣れたのか、そう固くもならず、食べたり飲んだりしていた。

真知子は、好ましそうにその横顔を見守って、

「三輪さんはその服装、自分でお揃いになるんですか」

「そうよ。この人、クラスでいちばんしゃれっ気が強いんですよ。女の子よりもおしゃれなんだから……」

と、とみ子がひやかした。

「でもさあ、親父^{おやじ}がそういうんだよ。あそこの家では、父親がいらないから子供が汚れた服装をしている、と言われては困るから、お前なるべくおしゃれをしらって……。そうなんですよ、小母さん」

重夫は人なつっこい調子で真知子に話しかけた。

「お父様がねえ……。お心をつかっていらっしゃいますのね」

真知子は、相手の言葉が胸に沁^しみたように、首を二度も頷^{うなず}かせた。

「なんだかうまく出来てるのね。……家でもそう言わないかな、男親がいらないけど、お前、お小遣^{こづかい}をジャンジャン使いなさいとかなんとか……。でも、あれよ、ママ。重夫さんって、お母さんがいなくて、こまかいことを注意する人がないもんだから、礼儀作法がよっぽど欠けているのよ。さっきみたいに、私を口笛で呼び出したりしてさ……。そうでしょう？」

とみ子の言い方は、べつに重夫を非難してのではなくて、ただ何となく絡^{から}んでるような調子だった。

「そんなことを言えば、お前だって女親だけで育てられたんだから、何かしら欠けてる所がありますよ……」

「そうねえ。そのはずだわねえ。何だろう、父親がいな

私の欠点って……」

「全部欠点じゃないか。欠点の塊^{かた}まりみたいなもんだよ、とみ子なんか……」

と、今度は重夫のほうで悪口を言った。

「それほどでもないわよ。いいとこだってたくさんあるわ……。貴方が私のあとにくっついてくるんだって、私に、いいところがある証拠だわよ。……そうだなあ、私って、お母さんにばかり育てられたから、細かく気がつく代り、重夫さんのようにのんびりしたところがないのが、人間として足りないところかも知れないわ。のんびりしようと思っても、私には出来ないんだもの……」

とみ子は、自分の内部をのぞくような目つきをして、そう言った。真知子の胸には、それが変に切なくこたえた。言っていることがほんとだし、それに、そういう大人っぽい反省が出来るようになったとみ子の成長が、いまさらのようには真知子の感傷を誘ったのである。

「たしかにそうだわねえ。私もそうならないように気をつけていたつもりだけど、女親だけの家庭ではだめなのねえ。もっとも、お前は女だから、あんまりのんびりされても困るんだかね……」

「もう先の試験の時、いびきが聞えるんでみんなびっくり

したら、それが重夫さんだったのよ。答案を書けるだけ書いて、あとは居眠りというわけなの……。しかもその答案がちゃんと及第点をとってるんで、脳の弱い私たち、ひがんにやったわよ……」

「へえ。まあね。……お母さまは、三輪さんが幾つの時、お亡くなりになりましたの」

と、真知子はしんみな調子で尋ねた。

「九つの時です」

「じゃあお顔を覚えておりますのね」

「ええ」

「三輪さんはお母さん似？」

「ええ。母を知ってる人はそう言います」

重夫は胸のポケットから、定期券入れ兼用の財布^{さいふ}をとり出し、中から写真を一枚ぬき出して、真知子に差し伸べ、
「これ、僕の母です」

真知子は、紋付の盛装をした、重夫によく似た中年の婦人の半身像をじっと眺めて、何か物を言う前に、知らずにポロポロと二、三滴の涙を溢^{あふ}れさせてしまった。それを、なんでもないように、ごまかして指先で拭^{ぬぐ}いながら、
「目や口元のあたりが貴方にそっくりなのね……」

「ママ、泣いたのねえ……」と、とみ子は、スッパぬくよ

うに言った。

「親と子がどうかしたっていうのが、いつだってママの泣きどころだわ。重夫さんもまた、ずいぶんけなげじゃないの。子供のころ亡くなったお母さんの写真を肌身^{はだかみ}はなさず持ち歩いてるなんて……二宮金次郎みたいに感心じゃないの。私は、パパの写真もってないわ……」

そう言って、真知子から写真を受けとって眺め、
「似てる……似てるわ……」

と、重夫の顔と見比べながら、感じのこもった調子で呟いた。

「そうじゃねえんだよ……」

と、重夫は自分が感傷的にみられたことがイヤだったらしく、わざと乱暴な言葉を使い、

「おれね、去年からこの写真を持ち歩くことにしたんだよ。なぜって、お前、でえあがくことが心配で、これ、お守りのつもりなのさ」

「ほっ、そうなの。狡い^{さう}わ……」

と、とみ子は頓狂^{とんきやう}な声を出して、

「貴方でも、でえあがくことが気がかりなの？ 私もしやあ、パパの写真を持ち歩こうかな。ママが感激して、また泣くかも知れないけど。そう、そうだったの？ 私、重

夫さんは脳が強いんだし、でえあがく、の心配なんかしてないと思ってたわ……」

「とみ子。ママをあまりばかにしないでちょうだい。何よ、その、でえあがく、というのは——？」

重夫ととみ子は、顔を見合せて笑った。

「小母さん。でえあがく、っていうのは、大学のことなんです。大学の試験が心細いものだから、それで僕、お守りのつもりで母の写真を持ってるんですよ」

「まあ——。でえあがくだなんて……。ちゃんと大学と言ったらいでしょう」

「小母さん、僕たちにとって、大学の入学試験っていうのは、とても恐いんです。だから、相手を尊敬して……いや、こちらの劣等感^{じゆうとうかん}を効かせて、でえあがく、と言うんです。感じが出てるでしょう」

「呆れたわ。……でも、でえあがく、でもなんでもいいから、二人とも、今年一べんでぜひ入るようにしてくださいね。どちらの家庭の事情も、それを切実に願っているわけですからね……」

「そうなるとね、ママ。わるいけど、私あまり自信がないんだ。重夫さんみたいに、どこかのんびりしている人が試験には強いものだし、私みたいに世間の知恵が発達してい

る者は、試験には弱いものなのよ……」

真知子は、深い嘆息を洩らして、

「やれやれ。ママも、出来ないものを無理にとは言わないわ。お前が、自分の人間について、いまみたいな反省が出来るっていうことだけで満足するわ」

食事はとうに終わっていたのだが、三人ともそのまま腰を落ちつけて、話しこんでいたのである。と、食堂の隅に置いてある電話のベルがなった。真知子が立ち上がって受話器をとった。

——はい。岩淵でございますが……。

三輪さん？ ああ、重夫さんのお父さまでいらっしやいますのね。……いいえ、まあ、こちらこそ娘がいろいろお世話さまになりました……。重夫さん？ まだいらっしやいますけど……。おやおや、まあ、ホホホ……。いまずぐ代りますから——。

「重夫さん、お父さまからお電話ですよ」

真知子は受話器を握ったまま呼びかけた。

「オヤジから……。何だろうな？」

重夫が首をかしげて立ち上がると、とみ子は鼻をクフンとやって、何かの匂いでも嗅ぐようにして、

「私、当ててみようか。貴方また何か忘れ物したんでしょ

う。きっとそうよ」

「忘れ物なんかしないよ」

重夫は簡単に言いきって、真知子から受話器を受けとった。

——僕、重夫です。……まだいるんだ。僕、無理にすすめられるんで、朝御飯を御馳走になっちゃった。エヘヘ……。いいんだよ。大勢で食べたほうがおいしいんだって、小母さまも言ってたよ。

なに？ あっ、しまった。持って来ようと思って、本箱の上にのせておいて、それぎり忘れてしまったんだ。

……犬のことに気をとられていたからだだよ。だから半分ぐらいはとみ子さんのせいだよ。いいよ、一日二日おくれたって……。いいよ、ちょっとぐらい怒られたって……。小母さま？ 親切だよ、とても……。親子でよく似てやがんのさ……。はい。気をつけます。さよなら

重夫は頭をかきながら、テーブルに引返して来た。とみ子はフンガイした面持で、

「私のせいにしてひどいわよ。それに、親子でよく似てやがるなんて、人ばかにしてるわ。……いったいなにを忘れたのよ。今日でないと怒られるものって……。ああ、授業料